

シラバスの向上と学生の授業評価による教育改善について —名古屋市立大学看護学部におけるファカルティ・ディベロップメントの試み—

小笠原 昭彦・小 玉 香津子・生 田 克 夫
大 平 政 子・北 川 眞理子・勝 又 正 直
(名古屋市立大学看護学部シラバス向上委員会)

1. はじめに

名古屋市立大学看護学部は、平成13年5月8日の第3回教授会において、「自己点検・評価ガイドライン検討グループ」から提案された、「看護学部自己点検・評価ガイドライン（以下、ガイドラインとする）」を承認した。ガイドラインには、自己点検・評価の理念に始まり、教育目標、入学者選抜、教育活動、研究活動等、多岐にわたる点検・評価の項目やその考え方が示されている。学部発足3年目を迎え、看護学の専門専攻科目の授業も本格的に始まった現在、教育活動についての自己点検・評価を行うことが急務であるという認識に立ち、教育活動のうち、授業の改善に取り組むことが教授会において決定された。

授業の改善は、いわゆるファカルティ・ディベロップメント活動の中核にあたり、さらにその中心はシラバスの充実にあると考えられる。また、授業改善を進めるに当たっては、教育を受ける学生がそれらをどのように受け止めているかについても視野に入れる必要がある。そこで、こうした考え方のもとに、「自己点検・評価ガイドライン検討グループ」が「シラバス向上委員会」に移行し、教育活動、特に授業の改善に取り組むこととなった。具体的には、①平成14年度からのシラバスの充実を行う、②シラバスの充実を受け、学生による授業評価を行う、という2点が、シラバス向上委員会に課せられた当面の役割である。

本稿では、これら2点を中心とした教育活動の改善について、大学教育の基本的枠組みに立ち返り、ファカルティ・ディベロップメントと授業改善などの基本をふまえ、看護学部におけるシラバス向上および学生による授業評価の方向性についてまとめたものである。なお、本稿は、シラバス向上委員会での検討資料を基に加筆修正したものである。

2. 大学教育の基本的枠組み

1) 大学教育の基本的枠組み

大学は、法的に認められた公的教育機関であり、まずは、学校教育法と大学設置基準により規定されている。これらをもとに、それぞれの大学、学部は、どのような教育を展開するかを、固有の教育理念・教育目標に表現している。それらを実現するために、それぞれ教育組織があり、教育目標を具現化するものとしてカリキュラムがつくられている（図1）。

2) 組織としての教育責任

さらに、個々の教員が担当する授業科目は、カリキュラムの中に組み込まれ、位置づけられている。すなわち、教員の担当科目の教育目標、内容は、カリキュラム作成と同時に、大枠として決められているのである。教員は、そのカリキュラム作成に参画し、できあがったカリキュ

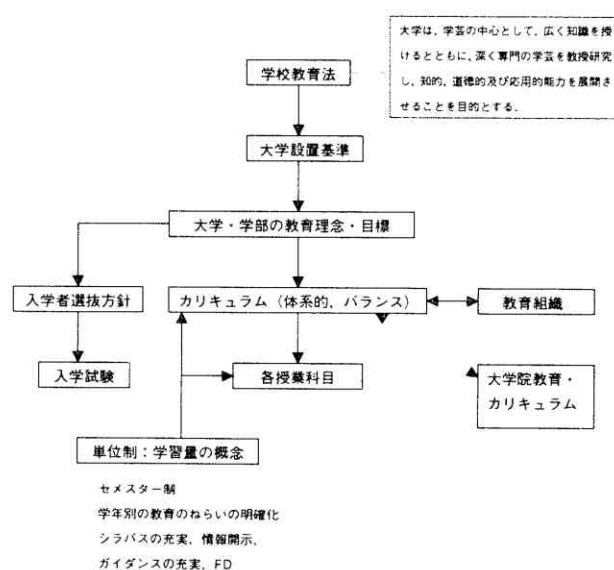


図1 大学教育の基本的枠組み

ラムの中での担当科目の教育目標をどのように達成するかを考え、授業計画を立て、授業を実施するのである。これを通して、大学は、組織としての教育責任を果たすのである。

各授業科目で何をどこまで、どう教えるかは、担当教員の自由裁量にまかされているとする考え方があるが、それであれば、大学は私塾の集まりとなってしまう、組織としての体をなさないことになる¹²⁾。

3. ファカルティ・ディベロップメントと授業改善について

大学審議会¹⁾は、「21世紀の大学像と今後の改革方策」という答申において、「各大学は、個々の教員の教育内容・方法の改善のため、全学的にあるいは学部・学科全体で、それぞれの大学等の理念・目標や教育内容・方法についての組織的な研究・研修（ファカルティ・ディベロップメント）の実施に努めるものとする旨を大学設置基準において明確にすることが必要である」と提言している（第2章－1－(1)－2）－④「教員の教育内容・授業方法の改善」。

1) ファカルティ・ディベロップメント活動

ファカルティ・ディベロップメント（Faculty Development、以下FDとする）は、大学における教員の諸活動を真に意味あるものにするための組織体的支援活動を総括する概念であり、個々の大学教員が所属大学における種々の義務（教育、研究、管理、社会奉仕等）を達成するために必要な専門的能力を維持し、改善するためのあらゆる方策や活動であるとされる²⁾。

ファカルティ（faculty）には、①能力（ability, mental ability）、②（ある学部の）教授団（teaching staff for particular university division）、③（大学の）学部（division of university）の3つの意味がある³⁾。したがって、FDにおいては、まず、教員個々人が、各自の自覚に基づいて、それぞれの能力開発を行うことが核になる。しかしながら、ファカルティには教授団や学部という組織を示す意味もあり、FDは、個人の努力に限定されるものではない。大学または学部が、組織としての教育責任を果たすために、構成員の資質・能力の向上を、組織として支援する必要もあることを意味している。

このことは、2. 大学教育の基本的枠組みにおいても述べたように、大学が、教育機関として、その教育理念・目標のもとに、学生の教育について、社会的な責任を負っていることから明らかである。したがって、FDは、教員各人の自覚にもとづく個人的努力であるが、同時に

表1 ファカルティ・ディベロップメント(FD)に含まれる活動（絹川, 1999）

1	大学の理念・目標を紹介するワークショップ
2	ベテラン教員による新任教員への指導
3	教員の教育技法（学修理論、授業法、講義法、討論法、学業評価法、教育機器利用法、メディア・リテラシー習熟度）を改善するための支援プログラム
4	カリキュラム改善プロジェクトへの助成
5	教育制度の理解（学校教育法、大学設置基準、学則、学修規則、単位制度、学習指導制度）
6	アセスメント（学生による授業評価、同僚教員による教授法評価、教員の諸活動の定期的評価）
7	教育優秀教員の表彰
8	教員の研究支援
9	大学の管理運営と教授会権限との関係についての理解
10	研究と教育の調和を図る学内組織の構築の研究
11	大学教員の倫理規定と社会的責任の周知
12	自己点検・評価活動とその利用

大学は組織としての責任を果たす上で、構成員の資質、能力向上を組織として支援する必要がある活動である。

なお、FDに含まれる活動には、表1のようにさまざまなものがあるが⁴⁾、ここでは、1. はじめにに述べたように、教育活動、中でも、授業の改善とシラバスの充実に焦点を当てて述べる。

2) 授業改善

教員の教育活動の中核をなすものが、講義、演習、実習などの「授業」である。2. 大学教育の基本的枠組みに述べた視点から考えると、「よい授業」とは、教育目標に対して、学生達がどれほどの成果を上げたかという観点から評価されることになる。ある科目の授業中に展開される学習活動の質は、教育目標と、教員の資質と、学生の期待や努力などの相互関係に依存する⁵⁾。したがって、授業においては、何らかの形で、教員と学生との間に相互作用（interaction）があり、それにより学生自身が学習への動機づけ（motivation）を高め、学生の主体的な学習が促進（facilitation）される授業がよい授業であると言える。

このような学生が主体的に参加する授業は、講義、演習、実習などの授業の形式に関わらず、また、指示的学習法、問題解決学習法などの教授法の形式を問わずに、重要である。学生が主体的に参加し、主体的に学ぶことができるためには、学生がその授業で何を教わり、何を学習するのか、その方法は何か、教室内では何をし、教室外では何をすることが求められているのか、その学習がどのように評価されるのかが、具体的に分かることが必要である。これを実現する方法がシラバスである。すなわち、シラバスとは学生をシステムの中で学ばせる仕組みである。

この授業改善を行うためには、第一に教員自身による

授業の自己点検が必要である。また、教員が試みた授業の改善や自己点検が、適切なものであるかどうか、あるいは、見落としがないか等について知るためには、学生からの授業評価を行うことが必要である³⁾。これらは、学部としてのFD活動の中に位置づけられなければならない。

さらに、授業そのものの改善ではないものの、教育のための施設設備、体制の充実や、研修機会の保証も必要である⁴⁾。すなわち、よりよい教育を実現するために、学ぶ場である教室・演習室・図書館等の施設・設備、視聴覚教材・図書・教育機器等の設備の充実が必要である。また、授業法改善の研修のためにワークショップなどへの教員の参加、あるいはそれらの開催等、授業改善のための組織的取り組みが必要である。

3) シラバス

シラバス (syllabus) は、3.2) 授業改善でも述べたように、学生をシステムの中で学ばせる仕組みである。シラバスの形式を固定的に考える必要はないとされるが、日本の大学ではシラバスとコース・カタログ (講義概要) が区別されていないことも多い。コース・カタログ (講義概要) は、授業科目の選択に用いる一覧である。それに対して、シラバスは、履修登録をした、あるいは、しようとしている学生に対して示す、その授業の設計図である。つまり、毎回の授業項目のリストではなく、既述の通り、学生がその授業で何を教わり、何を学習するのか、その方法は何か、教室内では何をし、教室外では何をすることが求められているのか、その学習がどのように評価されるのかを明示し、学生が主体的に学習することを具体的に encourage する方法である。シラバスが、実質的に機能するためには、単位制度を実質化することとともに、学生が教室外でも学習する習慣をつけることや、教室外の学習の場所、環境、資料、情報、図書館が整備されていること、オフィス・アワーなどの指導体制が確立していることが必要である。

4) 単位制度の基本

シラバスは、3.3) で見たように、システムの中で学生に勉強させる仕組みである。シラバスがきちんと機能するためには、単位制度の実質化が必要不可欠である。単位 (unit) は、授業の1個1個の組み立てをはかる単位であり、それによって履修をcreditする「クレジット制度」である¹⁰⁾。

単位制度とは、単位時間を基礎として、授業による学習の履修あるいはその授業に相当する学習の達成を認定する制度である。この考え方では、45時間を1単位とする。この45時間とは、標準的な学生が学習に要する1週

間分の時間である。すなわち、平日は1日8時間の学習を月～金の5日間にわたって行い、また、土曜日は5時間の学習を考えると、計45時間となる。

これを基本とすると、1学期は15週であるので、1学期の間には15単位分の学習ができることになる。したがって、1年間 (2学期) で30単位、さらに、4年間で120単位分の学習ができることになる。これは、大学設置基準に示された卒業要件である124単位にほぼ相当する。すなわち、単位制度とは、4年間の学習を1週間分の履修という単位で測ることができる尺度を提供しているのである。この「1単位は、標準45時間の学修」という大原則は、平成3年に大綱化された「大学設置基準」においても引き継がれている。

しかしながら、この単位制度の問題点は、その意義が十分理解されないままに導入されたことにある。アメリカでは、1時間の講義に学生は2時間の準備が課されているので、1時間講義を聞いたら、合計3時間勉強しているのである。また、3単位科目が標準であり、1学期に15単位、つまり5科目を取ることが通常である。すなわち、1日1科目に集中できることになる。これに対して、日本では1時間の講義だけを考えてしまい、1学期で30単位も登録できてしまう結果となった。30単位の登録を行えば、 $30\text{単位} \times 45\text{時間} = 1,350\text{時間}$ の学習が必要となる。これを1学期間の15週 \times 7日 = 105日で単純に割れば、土曜・日曜も含めて、1日約13時間も勉強しなければならないことになる。2単位科目をベースにしても、16単位も登録すると、 $45\text{時間} \times 16\text{単位} = 720\text{時間}$ となり、1週あたりの学習時間は48時間となり、多いことになる。現状では、学生達に1日フルタイム8時間の学習を行わせることは難しいので、70～80%の学生が基準を超えられる勉強方法をあわせて構築していく必要がある。それにより、授業での学生の動機づけを与えるノウハウを開発し、単位取得にあたり、学生の義務を明らかにすることで、教室外の学習習慣をつけていくことが重要である。

5) 学生による授業評価

学生による授業評価は、FDを推進する有効な手段の1つとして認識されている。これに対して、学生の評価能力の客観性や信頼性に対する疑念、学生に対する迎合への懸念などが指摘される。しかしながら、すでに学生による授業評価を行っている大学からは、総合評価と各評価項目の和の相関は高いこと、学生個々の評価はともかくクラス平均は信頼できることなどから、一定の信頼性はあるとする報告がなされている¹³⁾。

教員の立場からの授業改善の試みが第一になされるべきであるが、その教員の判断、改善の試みが適切であるかどうか、また、見落としがないかを、授業を受ける側

シラバスの向上と学生の授業評価による教育改善について

の学生の立場から確認することが必要である。これが学生による授業評価を行う意義である⁹⁾。

学生による授業評価を実施することは、人事管理面の利用に直結するという批判があるが、当面は授業改善の手だてとしてだけに用いることが必要である。授業改善のきっかけとして、教員の手で評価システム創出をしていくことが必要である¹⁰⁾。

4. シラバスの向上について

シラバスの基本については、すでに述べた通りである。一般的なシラバスの意味と機能については、井下⁴⁾を、また、シラバスの事例については、森平⁹⁾、井下⁹⁾を参照されたい。ここでは、看護学部において、シラバスを充実するための、当面の方向性について整理した。

1) シラバスの位置づけ

シラバスは、学生が主体的に学習できるよう、その授業科目での学習内容、学習方法、教材、教室内あるいは教室外における課題、学習成果の評価方法について明示するものである。しかしながら、シラバスは、単に形を整えればよいのではなく、あるいはシラバスに示したとおりに授業を進めればよいでもない。授業において教員と学生との間に相互作用を生じさせ、学生自身が学習への動機付けを高め、学生の主体的な学習が促進されるためのシステムがシラバスである。教員、学生の双方がこのことを十分に認識する必要がある。

2) シラバスに記載する項目

表2に看護学部シラバスの改善案を示した。井下⁴⁾を参考に、現在のシラバスから、3.4)および4.1)で述べた方向に近づける目的で作成されている。ただし、大幅な改善を一時に行うことは無理であるので、その意味ではマイナー・チェンジを諮ろうとするものである。この案にしたがってシラバスの充実を行い、後に述べる学生による授業評価の結果などをふまえ、さらに改善を図っていくことが必要である。

なお、オフィス・アワーは、週1回1時間程度、アポイントメントなしで学生が訪れてよい時間とし、必ず設けることとする。

3) シラバスのスタイル

シラバスの意義、携帯性を考えると、本来は、科目ごとに別々に作成されるものである。そこで、平成14年度のシラバスについては、次の方向で検討を進める：

- ① 履修要項とシラバスとを別に作成する、
- ② 履修要項は、従来通り冊子とする、
- ③ シラバスは冊子とはせず、科目ごとに印刷する、

④ シラバスは、学生には学年ごとに必要なもののみを年度初めのオリエンテーションで配布し、教員にはすべてを配布する、

⑤ シラバスは項目や記載事項が増えるので、1科目につきA4サイズ2ページ、両面印刷とし、上質紙を使用する、

である。ただし、履修要項については、教務委員会の所管事項であるので、これらの方向性については教務委員会との間で調整を行うものとする。

4) シラバスを生かすための環境・周辺条件整備

授業改善、シラバスの充実が、実質的に意味を持つためには、学生が授業場面以外でも学習する習慣をつけることが必要である。そのためには、すでに述べたように授業時間外にも、図書館、自習室等で学習できるような環境の整備、情報処理教室の利用促進、学習に必要な視聴覚資料、情報、図書の整備、さらには、主体的学習を促進するためのオフィス・アワーの確立など、環境、周辺条件を整えることが必要である。

なお、以上のことには、本来は、単位制度を実質化することが必要不可欠である。しかし、現状に鑑み、当面は、単位制度の持つ意味を教員、学生が十分に理解できるよう周知徹底をはかるものとする。

5) シラバスの確認

平成14年度の各授業科目のシラバスについては、①シラバスの意義を十分に理解しているか、②記載すべき項目が適切に書かれているか、の2点について、シラバス向上委員会において確認を行う。この確認を経たものをシラバスとして印刷する。

6) 学生へのガイダンス

シラバスは、学生がシステムの中で勉強できるようにするための仕組みである。したがって、教員のみがその意義等について理解しているだけでは不十分である。そこで、平成14年度以降、シラバスの意義、その利用等について、学生達にも周知徹底を図るために、教務オリエンテーションの中でシラバスについてのガイダンスを実施することが必要である。

5. 学生による授業評価の実施について

学生による授業評価については、2.5)で述べた。ここでは、看護学部において、学生による授業評価を実施するための提案および検討すべき点について整理した。

1) 学生による授業評価の位置づけ

シラバスの向上は、学生の主体的な学習を促進する目

的で、主に教員が、自らの授業の自己点検結果に基づいて行う授業改善の試みである。それが適切なものであるかどうか等について知るために学生による授業評価を行う。学ぶ側の学生の立場に立った授業評価は、FDを推進する有効な手段の1つであり、ここでは、授業改善の手だてとして実施するものである。

2) 組織としての授業評価

組織として授業評価を実施した経験を持つ東海大学や国際基督教大学では、授業改善の手だてとしてその結果を用いている。学生による授業評価が学生全体の授業理解度、学習達成度等の向上に資することが報告されている^{8,13)}。

組織として学生による授業評価を実施するには、その

目的、方法、基準、結果の解釈等について、関係者間であらかじめ合意が必要である。目的については、1) 学生による授業評価の位置づけに述べたとおりである。また、評価の結果を気にするあまり、学生におもねるようなモラルの低下が生じてはならないし、学生の不利益になるようなことがあってはならない。さらに、当然のことながら、教員個人のプライバシーの問題にも留意が必要である⁸⁾。以下、3、4)において、学生による授業評価の方法について、当面の方向性や検討すべき点についてまとめた、

3) 授業評価の方法

教員が個人レベルで授業改善に努める場合、例えば、①質問を書かせる、②感想を書かせる、③定期試験の答

表2 平成14年度シラバスに記載する項目について

	井下 (1999a)	平成13年度看護学部シラバス	平成14年度改善案	
①	科目名と科目コード (番号)	科目名 (英文表示を含む)	←	
②	担当者名	担当教員名 (ローマ字も含む)	←	
③	開講される曜日と時間帯および教室番号 (所在地)	* 時間割によって周知する	←	
④	当該科目の授業の目的とねらいあるいは主題と目標、主要テーマ	科目概要	科目概要、講義の主題	科目概要の他に、授業の目的・ねらい、主題と目標、主要テーマについて具体的に述べる。
			学習目標	学生に期待する学習目標について、具体的に述べる。
⑤	授業の形式や形態および授業方法	授業形態	←	
⑥	教材、テキストおよび参考文献	テキスト及び参考書	教材、テキスト及び参考書	教材、テキスト、参考文献を示す。テキスト以外の教材を使用する場合は、どのようなものか明示する。テキストについては、予習をしてほしいのか、授業に持参すべきかなども明示する。参考文献については、どのように参考にするかを示す (必読、1冊の本のうち読むべき部分はどこか、など)。
⑦	毎回の授業内容予定: それを表すタイトルやキーワード	授業計画	授業計画 (講義日、各回のテーマ、キーワード)	講義日を各自、カレンダーで確認して示す。毎回の授業内容予定を表すタイトルと、キーワード数個をあげ、予習できるようにする。
⑧	担当者連絡先	(履修要項に専門科目担当教員一覧) (専任教員については、研究室の位置を履修要項に掲載)	← (履修要項については、平成13年度と同様)	
			オフィス・アワー	学生がアポイントなしで教員を訪ねても良く、教員は学生への対応を最優先する時間帯として、オフィス・アワーを明示する。週1回1時間程度が最低限の目安とする。
			研究室	研究室の位置を、○階△研究室と表示する (○、△には数字)。
⑨	成績評価の方法や採点基準	評価の方法	評価の方法	成績評価の方法を具体的に記載する (例えば、レポートと筆記試験を併用する場合、それぞれの比率なども示す)。採点基準も可能な限り具体的に示す。
⑩	履修上の留意点や注意すべき点、担当者が受講生に期待する行動のルールの説明と指示	(なし)	履修上の留意点	受講学生に期待する行動の説明と指示 (予習、復習等) 以上を明記する。履修上の留意点、公欠の扱いなど、全体に共通する内容は、「履修要項」に掲載される予定。
⑪	その他	開講期間 (前期、後期の別) 単位数科目区分履修学年	←	

←は、平成13年度の通りとすることを意味する

シラバスの向上と学生の授業評価による教育改善について

教師のための講義評価アンケート	
問1 あなた自身のこの授業における学生としての自己評価を10点法で示してください。	←わるい (1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) →
理由:	
●教師について	
問2 声の質、声の明瞭度はよい。	× △ ○ ◎ (1) (2) (3) (4) (5)
理由:	
問3 話し方の速度はよい。	(1) (2) (3) (4) (5)
理由:	
問4 外観・みだしなみはよい。	(1) (2) (3) (4) (5)
理由:	
問5 講義における態度はよい。	(1) (2) (3) (4) (5)
理由:	
問6 講義に情熱を持っている。	(1) (2) (3) (4) (5)
理由:	
問7 健康状態(精神的、肉体的)はよいと感じられたか。	(1) (2) (3) (4) (5)
理由:	
問8 信頼できる人か、学生に平等に接しているか。	(1) (2) (3) (4) (5)
理由:	
問9 クラスの学生との関係はよい。	(1) (2) (3) (4) (5)
理由:	
●講義の内容と方法について	
問10 講義の質はよい。	× △ ○ ◎ (1) (2) (3) (4) (5)
理由:	
問11 講義の量は適当か。	(1) (2) (3) (4) (5)
理由:	
問12 講義は分かり易い。	(1) (2) (3) (4) (5)
理由:	
問13 将来役に立つと思う。	(1) (2) (3) (4) (5)
理由:	
問14 講義に興味されたか、興味をもてたか。	(1) (2) (3) (4) (5)
理由:	
問15 板書の仕方はよい。	(1) (2) (3) (4) (5)
理由:	
問16 あなたが大学で習ってきた他の教師に比べて、この授業担当教師の教え方をどう思いますか。	(1) (2) (3) (4) (5)
理由:	
問17 教師の講義に対する総合評価を10点法で示してください。	←わるい (1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) →
理由:	

●原簿では、これらの評定尺度法による質問は、マークシート方式で回答するようになっている。

図2-1 東海大学の授業評価表(表面;宮腰・山内、1999)

平成11年度愛知県立大学授業評価アンケート	
科目コード:	外国語科目(専門・一般)
上の欄に科目コード番号を記入して下さい。 この授業について、あなたは全体的にどのように評価しますか。以下の各設問に、該当する数字を空欄に書き入れて下さい。なお、設問24～30については、あなた自身の自己評価を行って下さい。	
評価	
4: と思う	
3: どちらかというと、と思う	
2: どちらかというと、と思う	
1: と思う	
1. 授業クラスの人数は適切な規模である。	
2. シラバス(講義概要)の説明は、この科目を学ぶのに十分参考になった。	
3. 教員は、授業全体の狙いや授業方法、学生の到達すべき目標について明確に伝えた。	
4. 一方的な知識の伝達ではなく、学生自身が主体的に取り組む機会も十分にあった。	
5. 教科書や補助教材(ビデオ、カセット、プリントなど)が効果的に活用された。	
6. 授業のレベルは自分にとって適切だと思う。	
7. 教員はしっかりと授業の準備をしてきていると感じた。	
8. 授業を進める速さは適切であった。	
9. 教員の話す言葉は聞き取りやすかった。	
10. 授業ノートはとりやすかった。	
11. 授業にメリハリがあり、重要なポイントをはっきりと示してくれた。	
12. 教員は、学んだことを復習したり確認しつつ授業を進めていった。	
13. 教員が授業の進行に支障が出るほどに脱線してしまうことはなかった。	
14. 知的興奮を覚えたり、もっと勉強したいという気持ちになった。	
15. 研究や教育に対する教員の熱意や真摯さが伝わってきた。	
16. 教員には、学生の発言や質問を積極的に促そうとする姿勢が感じられた。	
17. 教員は、学生の反応や理解度・達成度に留意しながら授業を進めていた。	
18. 教員は、試験やレポートについては事前に十分に説明した。	
19. 教員は、同一外国語科目の、他の授業との関連性や目的の違いについて説明した。	
20. 授業に一定の緊張感があり、単調すぎて眠くなることはなかった。	
21. 教員は、学生が自宅で行うべき学習について毎回明確に指示した。	
22. 教員は外国の文化などについても触れるなど、関心を持てるような工夫をした。	
23. この授業は、自分の語学力向上に役立ったと思う。	
24. 私は事前にシラバスをよく読むなどして、授業の概要を知ろうと努めた。	
25. 私はこの授業によく出席し、遅刻もほとんどしていない。	
26. 私語、携帯電話、飲食物持ち込みをしないといった基本エチケットは守っている。	
27. 私は、学ぼうという意欲や積極的な姿勢をもってこの授業に臨んでいる。	
28. 私は、辞書を十分に使い込んで学習していると思う。	
29. 私はこの授業に関して、予習、復習など、自主的な学習努力をしている。	
30. 私は、授業を理解するために、よく分からないことは積極的に質問している。	

図3 愛知県立大学授業評価アンケート(平成11年度)

設 問 欄	意 見 欄
問A 教師が学生をいらだせたり、気を散らせたりするような言動があれば、挙げて下さい。	回答A
問B 講義の中で改善すべき点がある点がありましたら、述べて下さい。これも教師にとって参考になります。	回答B
問C 講義の中で、あなたが特によいと思うものがあれば、教えて下さい。教師にとって大変参考になります。	回答C
問D あなたはどの科目内容を何を期待しますか、また、私の授業に何を期待しますか。	回答D
問E このアンケート、講義、教師等について自由に意見を書いて下さい。	回答E

図2-2 東海大学の授業評価表(表面;宮腰・山内、1999)

案の余白に授業への希望・感想を書かせるなど、様々な方法が考えられる。これらの方法は、手軽に学生の生の声を聞くことができるという利点があるが、授業改善の資料として学生の声を聞くのであれば、試験とは別に実施することが望ましい⁸⁾。

授業評価にあたっては、一般に質問紙形式の調査が行われる^{2,8,13)}。図2に東海大学の講義評価アンケートを⁸⁾、また、図3に愛知県立大学の「授業評価アンケート」を示した。その他、宮腰・山内⁸⁾には、いくつかの例が紹介されているので、参照されたい。

看護学部における授業評価調査項目については、シラバス向上委員会において、シラバスの充実ともあわせて検討を行い、具体的な評価項目、評価方法、集計・分析方法について検討し、原則として、評定尺度法による質問紙調査用紙を完成させることとする。評価項目については、すでに他大学で実施されているものを参考に作成する。また、評定尺度法による質問紙を実施することにより、結果の数量的な分析が可能となる。

なお、評価項目を作成する際には、上述の資料が参考になるが、次の点についても考慮すべきである。

- ① シラバスの項目に対応した評価項目を入れること……授業改善、シラバスの向上が、学生にどのように受け止められているかを確認するため
- ② 学生自身の主体的な学習態度についての評価項目を入れること……授業改善、シラバスの向上は、学生の主体的な学習を促進する目的で行われているため

4) 調査の実施と結果の処理

学生による授業評価は、平成14年度は試行段階として、次のように実施する。

すなわち、授業評価を実施する科目は、前・後期それぞれ、教員1名あたり1つの授業科目とする。これは、1) 調査項目も含め、適切な授業評価の方法を検討する、2) 教員・学生双方に過大な負担を与えない、ためである。なお、各教員が授業評価を実施する科目は、原則として自己申告制とする。ただし、科目区分別(専門関連科目、専門専攻科目)および学年間で偏りが生じた場合には、シラバス向上委員会が調整を行う。また、前期、後期のいずれかにしか授業のない教員はその範囲から評価対象の科目を選択する。さらに、2名以上で担当する授業については、評価の対象とはしない。

実施に当たっては、定められた調査用紙を用い、次のように行う⁸⁾。

すなわち、学期末試験の約2週間前にシラバス向上委員長から各教員に調査用紙が届けられる。教員は、学期の最後の講義の中で5～10分程度を割り、教室内で回答させ、回収する。回収後の「授業評価表」は、封筒に封入の上、シラバス向上委員長に届ける。シラバス向上委員会では、可能な限り速やかに、評価得点の分布、平均値、標準偏差の算出等の統計処理を行い、当該教員に返却する。返却する際には、学部内全教員での平均値・標準偏差、専門関連科目・専門専攻科目別の平均値・標準偏差等を添付し、比較ができるようにする。図4に東海大学の「授業評価報告書」を添付したので、参照された

い¹³⁾。

なお、記入済みの回答用紙および統計処理の結果は、担当教員以外のものの目に触れないよう厳重に取り扱う。また、評価結果の処理にはコンピューターを用いるが、データの入力等にあたっては、予算の配慮を行った上で、業者委託を検討する。

5) 授業評価実施結果のまとめと公表

学生による授業評価を実施した結果については、上述のように、各教員に返却するほか、教員のプライバシーを守れるよう配慮した上で、①科目区分別評価、②教員の職位別評価、③年齢別評価等の分析、また、④多変量解析手法を用いての総合評価に影響する評価項目の検討などを、シラバス向上委員会が行い、教授会に報告するものとする。公表の方法については、シラバス向上委員会の議により、教授会が定める。

6. ま と め

- 1) シラバスの向上と学生による授業評価の実施による名古屋大学看護学部における教育改善の試みについてまとめた。
- 2) 大学教育の基本的枠組み、ファカルティ・ディベロップメントと授業改善の2つの視点から、教育改善の基本理念について述べた。

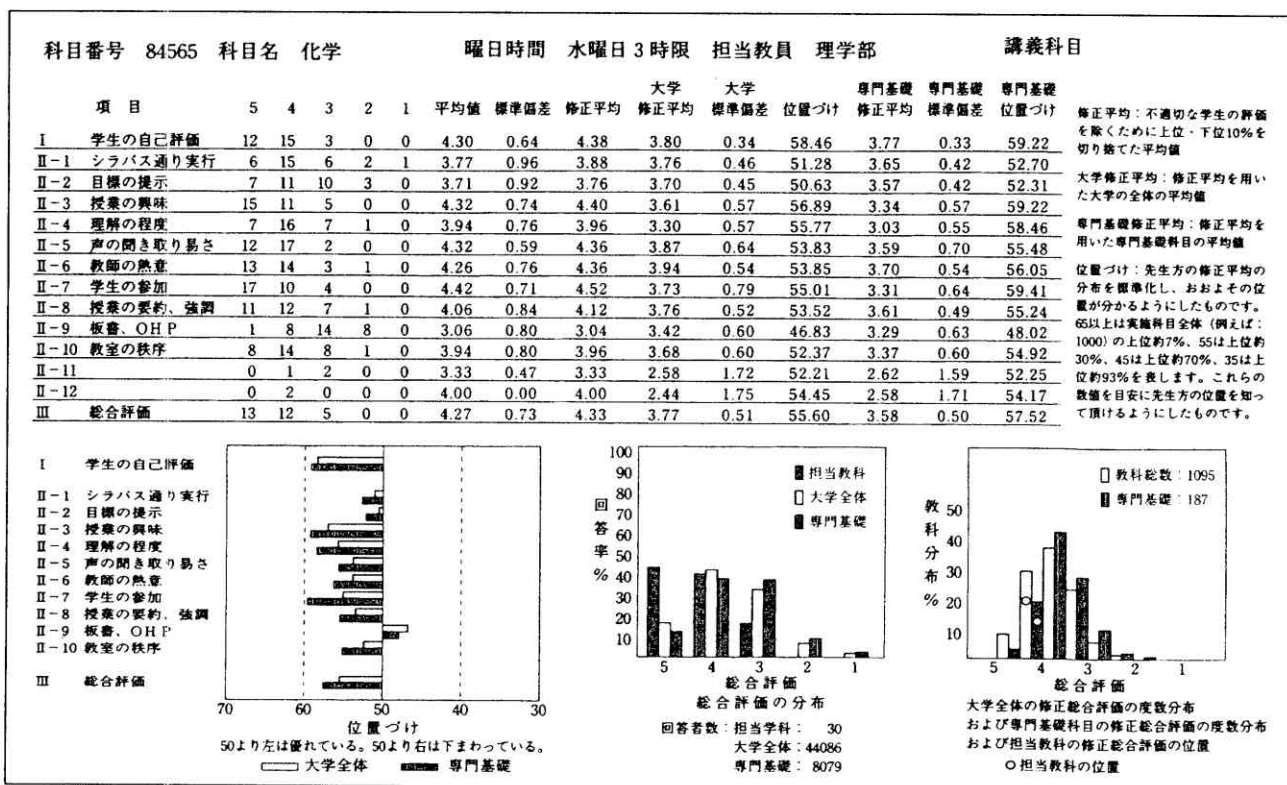


図4 東海大学の授業評価報告書(安岡, 1993)

シラバスの向上と学生の授業評価による教育改善について

- 3) シラバスの向上、学生による授業評価については、平成13年9月までのシラバス向上委員会での検討結果に基づいて記述した。したがって、これらの具体的な方法については、今後の検討過程において、修正が施され、また、さらに具体化されることがある。
- 4) シラバスの向上や学生による授業評価を実施し、教育改善の実効をあげるには、それらを形式的、手続き的に進めるのではなく、教職員・学生の両者が、その基本理念を十分に理解することが必要不可欠である。
- 5) 本稿で示したシラバスの向上、学生による授業評価は、最終的に完成されたものではない。したがって、平成14年度以降、実施した結果を適切に評価し、さらに改善をめざした活動が必要である。

7. 付 記

シラバス向上委員会は、本稿執筆時点である平成13年9月末までに2回の委員会を開催した。今後、平成13年12月に第3回委員会を開催し、シラバスの向上についての方針を確定し、その後さらに、学生による授業評価について具体的な検討を進める予定である。

8. 文 献

(1) 引用文献

- 1) 大学審議会：21世紀の大学像と今後の改革方策について―競争的環境の中で個性が輝く大学―（答申），1998.
- 2) 藤井亀：授業評価アンケートの解析について，大学の教育・授業の未来像―多様化するFD―（大学の教育・授業を考える）（日本私立大学連盟編），107-118，東海大学出版会，2001.
- 3) 原一雄：よい授業とは何か，大学力を創る：FDハンドブック（大学セミナーハウス編），40-47，東信堂，1999.
- 4) 井下理：シラバスの意味と機能，大学力を創る：FDハンドブック（大学セミナーハウス編），62-80，東信堂，1999.
- 5) 井下理：シラバス事例②「社会調査法」，大学力を創る：FDハンドブック（大学セミナーハウス編），77-80，東信堂，1999.
- 6) 絹川正吉：FD（Faculty Development）とは何か，大学力を創る：FDハンドブック（大学セミナーハウス編），15-18，東信堂，1999.
- 7) Microsoft: Encarta World English Dictionary, 1999, 2000.
- 8) 宮腰賢・山内正平：授業評価と教員評価―求められるFDの努力―，大学力を創る：FDハンドブック（大学セミナーハウス編），102-117，東信堂，1999.
- 9) 森平爽一郎：シラバス事例①「経営分析論」，大学力を創る：FDハンドブック（大学セミナーハウス編），73-76，東信堂，1999.
- 10) 館昭：授業の充実と教育課程の整備，大学の教育・授業の未来像―多様化するFD―（大学の教育・授業を考える）（日本私立大学連盟編），33-54，東海大学出版会，2001.
- 11) 寺崎昌男：大学教育の歴史と今後の展望，大学の教育・授業の未来像―多様化するFD―（大学の教育・授業を考える）（日本私立大学連盟編），3-32，東海大学出版会，2001.
- 12) 山本浩：ファカルティ・ディベロップメントについて考える，大学の教育・授業をどうする―FDのすすめ―（大学の教育・授業を考える）（日本私立大学連盟編），189-200，東海大学出版会，1993.
- 13) 安岡高志：学生による授業評価の試み，大学の教育・授業をどうする―FDのすすめ―（大学の教育・授業を考える）（日本私立大学連盟編），91-114，東海大学出版会，1993.

(2) 参考文献

- 1) 阿部謹也：学問と「世間」，岩波書店，2001.
- 2) 大学セミナーハウス（編）：大学力を創る：FDハンドブック，東信堂，1999.
- 3) Davis B.G. & Wilson R.: ABC's of Teaching with Excellence, Teaching Innovation and Evaluation Services, University of California, California, 香取草之助（監訳）授業をどうする！―カリフォルニア大学バークレー校の授業改善のためのアイデア集―，東海大学出版会，1995.
- 4) 池田輝政・戸田山和久・近田政博・中井俊樹：成長するティップス先生―授業デザインのための秘訣集―，玉川大学出版部，2001.
- 5) 荻谷剛彦：アメリカの大学・ニッポンの大学―TA・シラバス・授業評価―，玉川大学出版部，1992.
- 6) 名古屋市立大学看護学部自己点検・評価ガイドライン，2001.
- 7) 日本私立大学連盟（編）：大学の教育・授業をどうする―FDのすすめ―（大学の教育・授業を考える），東海大学出版会，1993.
- 8) 日本私立大学連盟（編）：大学の教育・授業の未来像―多様化するFD―（大学の教育・授業を考える），東海大学出版会，2001.

(3) 参考ホームページ

- 1) 名古屋大学高等教育研究センター：成長するティップス先生（Ver.1.1），2001.
(<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/tips/>)

- 2) 名古屋大学高等教育研究センター：ゴーイング・シ
ラバス・コースウェア (Going Syllabus Courseware),
2001.
(<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/gs/course/index.html>)